れることがある（奥山，1935 参照）。こうした個体がトリガタハンショウヅルの変異の範囲内にあることは明らかであり，シロハンショウヅルという名も上述した形質がたまたま顕著に現われた個体に名づけられたものと思うが，たとえ変種や亜種のレベルでも taxon として確立するには当らない。

□毎日新聞社：**手漉和紙**　全 3 冊，袋入り，和紙和装；解説書 pp. 148；標本紙編（上）pp. 145，生漉紙 200 点張込；（下）pp. 185，漉模様紙，加工和紙等 250 点張込；毎日新聞社，東京，1975 年 5 月，¥ 80,000。なお国が指定した無形文化財保持者が製作した六葉を附録としている。日本の紙は中世に庶民社会に徹底しはじめ，江戸時代になって旧藩の支持を受けて大いに発達した。明治の最盛期に生産家は 6 万 8 千を数えたのである。それが，近代化の波におされて急速に衰え，今は 800 余に過ぎないという。現存する和紙を集めるのはもう最後と思われたので，毎日新聞社はその創刊百周年紀念として，各方面の支持のもとに，手漉和紙大鑑全 5 巻を編んだのが昭和 49 年であった。それがすでに絶版なので，その中から解説の大部分を再録し，森田和紙の森田康敬専務の収集による，生漉紙 200 点と，加工和紙等 250 点を以て，3 巻としたのであるという。3000 部の限定出版である。8 万円は高いが，上述の次第をみると止むをえないと思われる。解説編には，和紙の歴史，製法，産地の現状，正倉院の紙，美術工芸，文学等との関係，年表，文献を挙げている。色々と教えられるところが多いが，ケンフェルの Amoenitatum を異邦珍事誌と訳したり，コウゾの品種にコウゾ，カジノキ，ツルコウゾなど 4 品種があるとするなどは少々困る。標本紙編は大体 6×10 cm の横長に切った紙を左側に 3 枚毎はり，右側に解説を印刷してある。じつにデリケートな差異があって中々あきることがない。説明をみると多くのものが廃絶におびやかされていることを痛感する。標本紙篇下巻は種々なすかしや模様があってにぎやかであるが，京千代紙の模様の差などは少し的をはずれた感なきにしもあらずである。（前川文夫）

□広東省植物研究所：**海南植物誌**　第三巻 Flora Hainanica tom. 3 pp. 629 ff. 527-942 科学出版社 1974, Oct. 5.7 元 1965 年に第一，第二巻が出版されてから，ようやく第三巻が出た。本書にはクロウメモドキ科からあとの離弁花類と合弁花類とを含んでいる。科，属，種毎に記載を添え，属間の検索表も加え，また主な種には挿図もあるし，栽培種にも及んでいるのでかなり意慾的である。学名には出典も挙げ，巻末には 26 ページの新群の記載もついている。正宗氏のリストと較べると，たとえば *Symplocos* は 15 種から 26 種に *Hedyotis* は 15 種が 25 種とかなり増加しているので，内容は相当充実したことがわかる。速やかな完成を祈る。定価 2,280 円は安い。

（前川文夫）